

ATACカンファレンス2011 プリカンファレンス
コース1 基礎セミナー

重度重複障害のための AAC・AT・ME(医療技術)

重度重複障害のためのAACとAT

1. ATとAACについて
2. コミュニケーションについての3つの誤解

コミュニケーションを豊かにする
ためのキーワード

•ATとAAC

AT

- AT(アシスティブ・テクノロジー)とは「障害による物理的な操作上の不利や、障壁(バリア)を、機器を工夫することによって支援しようという考え方」(教育の情報化に関する手引,文部科学省)
- 学校教育においては「個々に応じた個別の指導計画に沿って行われることになろう」と述べられている。

AAC

- AAC(拡大代替コミュニケーション)とは手段にこだわらず、その人に残された能力とテクノロジーの力で自分の意志を相手に伝えること
(AAC入門, 中邑賢龍)

とれているようでとれていないのが コミュニケーション

- 相手の意志を正しく読み取るには2つの技術が必要(テクニックとテクノロジー)
- 思いこみで子どものことばを代弁していないか、自分自身を問い直してみましょう
- 子どもたちの置かれている状況を見直してみましょう

3つの発信行動

- 注意喚起 (Attention seeking)
- 受容 (Acceptance)
- 拒否 (Rejection)

発信行動の少ない子どもでも、この3つのサインは出しているといわれている。

1, コミュニケーションについての3つの誤解

- I. ことばの話せない子どもはコミュニケーションしていない
- II. コミュニケーションが出来るようにならないと始められない
- III. 機器を使うと言葉が出なくなる

I, 「ことばの話せない子どもはコミュニケーションしていない」か？

人間は本来コミュニケーションするようにプログラムされている

赤ちゃんは母乳を休みながら吸っている

(0歳児がことばを獲得するとき 正高信男)

赤んぼうは泣き声で親をコントロールしている

(言葉はなぜ生まれたか 岡ノ谷一夫)

II, 「コミュニケーションが出来るようにならないと始められない」か？

- 自転車の練習の話

III, 「機器を使うと言葉が出なくなる」か？

- ① 意欲を育てる
- ② 経験を増やしていくことで広がるもの
- ③ あなたはすべて生身でやっていますか？
- ④ 大切なのは多様なコミュニケーションモードを持つこと

①意欲を育てる事

- 「障害があるからできない」のか「障害があってもできるのか」
- できることを増やす活動
- 楽しさの中から活動は生まれる

②経験できないと学べない

- 経験できるように工夫する
- その為に、玩具・環境を工夫する
- 達成経験を自信に育てる

脳は「正しいことを学ぶ」のではなく、
「間違っただけを取り除いていく」ことで、
スキルが熟達していく、という仕組みに
なっている
参考図書：記憶力を強くなる(池谷裕二)



孔子の言葉

- 聞いたことは「忘れ」
- 見たことは「思いだし」
- やったことは「忘れない」

③あなたはすべて生身でやっていま すか？

- どこに行くのも歩いて行っていますか？
- ご飯を作ったことはありますか？

④楽しい活動で意欲を育てる

- 好み等、個人差に十分配慮する



コミュニケーション支援のために大切にすること

- 環境を整える
- 無理のない姿勢に配慮する
- 操作の方法を十分検討する
- 失敗の無い活動からはじめる
- 十分に待ってあげるようにする
- 興味がないと思ったら潔く撤退する
- 理解するには時間がかかる
- ことばだけでない表現をする

最後に

- いかにかどもとの関わりを豊かにするか
- 常に情報を得るためのネットワークを持つ
- 同じ素材でもアイデア次第で様々な使い方ができる
- 大人もこどもも楽しめること
- 見通しをもつ
- 俯瞰して考える

インシデントプロセス法を使った アシスティブテクノロジー・ コンシダレーション会議

ATコンシダレーションとは？

- アシスティブ・テクノロジー (Assistive Technology)
 - 米国では連邦法IDEAによりATの計画・実施に法的拘束力を持たせている。
 - 障害のある児童生徒はIEP(個別教育計画)が策定・実施される。
 - IEPチームは適切なATサービスとコンシダレーション(consideration)を行う必要があるとされる。

(文献)大杉成嘉(2009), 障害のある子どものためのアシスティブ・テクノロジー・コンシダレーション方法の開発. 日本教育情報学会誌, 25(3), 15-27.

チームによる問題解決支援の必要性

- 日本でも近年, 特別支援教育のカリキュラム策定・実施において, 個別の指導計画, 個別の教育支援計画, 個別の移行計画が重視されるようになった。
- 個別の指導計画等の策定場面において「チームによる問題解決」が注目されるようになってきたが, アシスティブ・テクノロジーの利用については担当者の判断が中心となることが多い。
- そこで, 米国のようにシートを援用し, 関係者が協議を進める方法を試行した。

インシデントプロセス法について

- マサチューセッツ工科大学(MIT)のピコーズ教授夫妻により考案された事例研究法の一つ
- 事前に資料を用意することなく検討会議が進められる
- 参加者全員が主体的に参加することが可能になる

ルール

- 話題提供者を非難したり, 努力の不足を指摘することはしない
- **話題提供者**は, 事実だけをありのままに述べる。
- **司会者**は, 話題提供者の考えや想いと事実を区別するよう促す。
- **参加者**は, 事実に関する質問をする。
- **司会者**は, 抽象的な質問は具体的な形に変換してから質問するよう促す。
- 時間厳守。**司会者**はタイムキーパー役もつとめ, 時間オーバーの発言は容赦なくストップする。

グループ分けと役割分担

1グループ10名の4グループに分かれる

- 司会 1名
- 話題提供者 1名
- Aチーム 4名
- Bチーム 4名

流れ

- 話題提供者のインシデント発表(5分)
- Aチームの質問(10分)
- Bチームの質問(10分)
- 問題の解決方法の考案(19分)
- 問題の解決方法の提案
 - Aチーム(5分)
 - Bチーム(5分)
- 話題提供者のコメント(1分)